

## 諏訪地域における環境意識とネットワーク構造の現状と歴史的变化

大串 潤児

信州大学人文学部

Ogushi Junji

Faculty of Arts, Shinshu University

---

キーワード：諏訪学、歴史意識

Key words: Suwalogy, historical consciousness, attitude to the Past

---

### 1. 人文学部の課題意識

諏訪・天竜プロジェクトへの人文学的観点からの課題は以下のようにたてられている。

(1) 諏訪地域における事業者間ネットワークの現状分析

(2) ネットワーク構造の前提となる組織の倫理観と地域環境

(3) ネットワーク構造と環境問題への対応の関連

(4) 環境問題、地域の歴史について意識の史的分析

以上、(1)～(2)は主として中嶋聞多グループ報告を参照ねがいたい。(3)については現状では若干の展望を示すに止めざるをえない。

大串潤児グループは(4)の問題について歴史学の観点から基礎的な研究を進めている。

最近刊行された信濃毎日新聞社編集局編『諏訪人と風土』(信濃毎日新聞社 2002)はこうした関心からも非常に興味深い論点を提起している。歴史的「風土」と地域の多元性、ものづくりと人々のネットワーク、さらにその底をなされる自然環境と地域の人々との関係性。本書が提起するように「諏訪学」をより深めて行くとすれば、歴史意識というエートスの問題、ネットワークの現状とそれを支える人間主体の環境・歴史についての思想を分析・記録しておくことは大変意義あることだと思われる。

### 2. 歴史学における環境論・環境問題論

歴史学において「環境」とは大きく2つの意味で考えられよう。第一に、自然環境や地理的環境、そ

れに制約、あるいは根ざした文化といった、長期的視野にたってはじめてその変動が見えてくる構造の問題である。第二に、直接的に問題として、あるいは運動や人々の言説としてある時点に登場してくる「環境問題」の構造・歴史である。

(1) 第一の視点にたった歴史学の古典的著作としてF. プロードル『地中海』があるが、そこでは事件や出来事の底でゆっくりと変化していく歴史の深層を描くことが主眼となっている。この著作でプロードルが着目したのは、人間の身体と心という問題であるが、長期的統計や地域で比較的長期間にわたって残されている史料を用いることで、諏訪・天竜という1つの地域世界を描くという方法も考えられる。

長期的な視野にたった諏訪・天竜地域の近現代史については、南信州新聞社からの依頼で『南信州』(創刊 1954年)を通じてみる「伊那谷の戦後史」という連載を開始する予定になっている。そこでは、衣食住や健康、娯楽、教育、入会山や水利権などの人間と自然環境といった問題を軸にして、新聞という限られた史料ではあるが、長期的な構造変化のすじみちを追ってみたい。科研とは直接関係はないが、相互にその成果を利用しあえるものとなろう。

(2) 長期的な歴史の変動という問題にあっては、その一部に民衆の歴史意識(歴史についての考え方、心性)という問題があるはずで、そうした問題は諏訪・天竜という広域的な対象を設定するよりは、よりミクロな地域社会を設定して考える方法がふさわしい。諏訪地域では市町村レベルの自治体史のみな

らず、区・字レベルの歴史書が多く刊行されており、その作成には各区などが永年保存してきた文書・記録、あるいは口伝の存在がある。

社会教育における歴史講座や、アカデミズムの外側で発展した民間史学の伝統をもふまえれば、諏訪地域の人々が環境問題を、あるいは人間関係を考える上で、自らの歴史を如何に考えているかは興味深い問題である。

(3) 今回科研において諏訪地域の各自治体史を市町村のみならず旧村(合併前)・区レベルにまで収集していったのは、そうした問題を扱うに相応しい地域を設定するためであり、現在のところ、1つの有力な対象地域として旧諏訪四賀村を挙げておきたい。

諏訪四賀村には、各区有文書をはじめ青年会の文庫などたいへん貴重な史料が住民の努力によって保存されてきているようである(『諏訪四賀村誌』)。こうした文書保存をささえた人間関係とその歴史意識は大変重要な論点となるであろう。

また、諏訪四賀村は、昭和恐慌期以後、つまり諏訪地域全体が産業転換を迫られていく時期に、農村経済更生運動の県下の「模範村」の1つでもある。また、入会山をもち、その意味では歴史的にも自然環境と人間の関係について多くの経験を積んできた地域である。

今年度は、本格的な地域調査の前段階として、対象地域を選定することに第一の目的をおいた。なお、詳細な自治体史の検討は残されており、また、岡谷地域にも史料の残存状況によっては有力な候補地域もある(今井地区、小井川地区)。

(4) 第二の「環境問題」史的アプローチについては、環境問題を軸にしつつも、それに関係した諸運動団体や地域住民組織、行政の対応や世論動向など多くの要素を分析していく必要がある(飯島伸子『環境問題の社会史』有斐閣 2000)。諏訪地域にあつては、なによりもピーナスライン問題が重要であるが、農学部の研究ともつきあわせる必要性もあつて、現在のところ関係新聞記事や雑誌記事などの基礎的史料収集の域を出ていない。

### 3. 今後の課題と協力依頼

#### 1) 諏訪地域の各自治体史の収集と検討

とりわけ、編纂の時期や問題意識に注目し、諏訪

地域の人々が自らの歴史を編纂することにどのような意味を与えていたのか、その歴史的变化について考える。

#### 2) 旧諏訪四賀村へのフィールドワーク

編纂関係者への聴き取り

史料の残存・保存状況の確認

青年会や婦人会など、比較的地域の問題について積極的な発言をしている個人・団体の史料を中心に収集(あるいは閲覧)調査を実施する。

3) 1. (1) (2) のプロジェクトと連動しつつ、現在の諏訪地域にあつて社会的ネットワークを積極的に担っている主体の歴史意識について調査